

## 初単そしてループ

3年 松山 雅美

「起床!!」宿当の声と共に8月9日の朝は明けた。朝の冷やかな空気が、昨日ヒゲをそったばかりの頬に心地よい。やはり男はどんな時でも身だしなみに気をつけたいものだ。R/Wに着くと、さっそくフライトが待っていた。今日の教官は、S氏。相手にとって不足はない。2回のフライトの後、S教官は言った。「次のチェックであかんかったら、当分ソロはないと思えよ」。望むところだ。男は常に身を崖つぶちに追い込まねばならない。そこで男の真価がためされるのだ。

「よし! そしたら行ってくるか」。ついにS教官のGoサインが出た。背筋に軽い戦慄が走る。

「出発!!」ゴロリと機体が動きだす。2人のときより操縦桿が軽い。思ったよりUpをとられる。離脱。すぐ速度ぬけが起こる。あっ! 滑っている!! フッ、このジャジャ馬娘め! かわいい奴だぜ。数分間の機体との2人っきりのランデヴーを楽しんだのち、いよいよ場周へむかう。さあ着陸だ。懐かしのわが家が待ってるぜ。パス角よし。速度よし。えーっと他にチェックすることは……。あっもうR/Wが目の前だ。引き起した。ワー!! (ドスン)。機体は2段ジャンプをしたあと軽くループして止った。すぐ無線から野太い、イヤ黄色い声が聞える。「松山君、初ソロお目出度うー!」。機体から降り、ピストにたどりついた俺にS教官が一言、「ガックリ」。最高の讃辞だ。たまたま来ていた立教の諸君も「はねた後、ループまでしたのは初めて見ました」と言っていた。彼等にいい土産となっただろう。

R/Wから帰る途中、夕陽が廃油まみれの身体にやさしくふりそそいでいた。

## ああ、こわかった

1年 大館 美和

「降りるー」。私のウインチ曳航はこの言葉から始まりました。学科を受けた時からワクワク楽しみにしていた初ウインチも残ったのは恥ずかしかった思いだけ。教官は「ジェットコースターだと思え」とおっしゃったけど、それが苦手な私には何のなぐさめにも。

でも離脱後のあの解放感はATと矢張り変らなかった。自分がちょっとスティックに触ると反応する機体が、最初は「へ?」って感じだったけど、発着が増えるほど「ウフ」に変わってきて、今はまだ私の思うように動かないわがまま(?)な機体に、いつの日か私をナウシカしてくれる日を胸をふくらませて期待しています。

入部して5カ月弱にして、去年までの自分にはもう戻れないと気づいてしまうほどすっかり航空部員としての道がしかれている状態ですけど一人で飛ぶ日を夢みてやさしい(?)先輩についていくつもりですのでよろしくお願いします。

## ワクワクドキドキ

1年 山本裕子

私が航空部に入部したという事実にも最も驚いているのは誰よりも私自身ではないかと思う。

入学して間もない頃、白くてきれいな機体はすぐに目にとまった。大学に入って何か新しいことを始めたいと思っていた私はとても興味ももったが、やるからには中途半端でやめたくなかったし、こんな好奇心だけではとてもやっていけないだろうと思っていた。

実はやっと決心して6月に入部してからも、そんな不安はずっと続いていた。初めての合宿が近づくにつれて、不安は強まり、一度もグライダーに乗らないうちから「にげだそうか」なんて(とんでもない)ことまで考えていた。

しかし本人の予想に反して、初フライトを目前にした私の心の中は“ワクワク”でいっぱいだった。これには我ながらびっくりしてしまった。

感想は“感動”のひとつだった。マッチ箱ほどのプールで泳ぐ子供達や、小指のつめほどもない車を見下ろしながら、上空では本当に涙が出るくらいうれしかった。

2回目からは、もう自分で操縦したくてたまらなかつた。生意気にも「トリムセットができない」だの「離脱のタイミングがわからない」だの言って教官を困らせてしまった。「まだ3回目なんだから、わかるわけないだろう」とあきれられたに違いない。とにかく私は1回のフライトでグライダーにはれ込んでしまった。残念なのは、1回1回を大切に飛ぼうと思う余りに少し力んでしまったことなので、もちろん1回1回を大切にすけれど、楽しくフライト出来たらナァと思う。

最後の学生生活である大学で、うちこめるものがみあったことが非常にうれしい。

## 憧れの第一歩

1年 山本晋市

航空部。それは今まで、なにごとにおいてもイマイチ中途半端で終わらせてしまってきた自分には、この上もないほど輝いて見えたものであった。皆が同じスタートラインにいること。半端なサークルなどで4年間の大学生活を終りたくない思い。そして物心ついた頃から尽ることのなかった大空への憧れ。その全てを満たしてくれるのが航空部であった。

入学早々に出店に赴き、迷うことなく入部。この時既に自分のグライダーに対する思い入れは、他の新入部員の誰にも負けない自信があった。勿論今も変わっていない。

誰もが苦にする学科も自分には全く苦には感じられない。そして初合宿。不安と、とまどいにかられながらも計5発のフライトの1ツ1ツが自分の全てを満してくれるようなものに思えた。短かいながらも今日までの日々を振り返ってみると、後悔しない道を初めて歩んできている実感があふれている。まだまだ未熟ではあるけれども、夢はデッカク全国制覇!?

### 新入部員10人に聞きました

- \* 圧迫感を受けた。
- \* 顔がヘラヘラ。
- \* ただ楽しかった。
- \* 気持が良い。
- \* 15分が短かった。
- \* 速度感が良い。
- \* 教官はウマイ。
- \* 早く慣れたい。
- \* 失速をしてほしかった。
- \* 360°の視界が素晴しかった。

## この感激

1年 山根達矢

初めてのウインチ曳航はとても感動的でした。グライダーがウインチで引っ張られた瞬間、僕の顔はニヤケっ放しでした。自分は空を飛んでいると思うと、とてもうれしくなりました。木曾川の景色は、福井より数倍良く、感激しました。

地上での仕事はなかなかしんどかったです。ピス交や索点などは、めんどろくさくて、途中で嫌になりそうになりました。しかし自分の搭乗が回ってくると、また元気になりました。

福井の時はわけもわからず飛んでいただけだったのですが、木曾川では自分で飛んでいることが

意識できるようになりました。

今まで1つの物事をやり抜くということにさめていた僕ですが、今度はそういうわけにはいきません。自分の限界に挑戦したいと思っています。

短い飛行時間を有効に使えるように精神を集中して搭乗しようと思っています。そのために、学科を十分に復習し、空でそれが生かせるようにしたいと思っています。

これからの4年間を無駄にしないように努力したいと思います。

ASK-13 JA2256

